

「エネルギー正義」について

「エネルギー正義」(Energy Justice)とは日本ではまだ耳慣れない言葉だが、欧州を中心に急速に研究が進んでいる分野である。細かな定義は論者によるが、基本的には、エネルギーに関する様々な問題における社会正義(の実現)のことであり、より具体的には、エネルギー利用がもたらす便益と費用の公平な分配、エネルギー利用に関する開かれた、透明性の高い意思決定プロセスの確保、などを意味する。その代表的論者の一人である Benjamin K. Sovacool は、エネルギー正義に大きく関わる具体的な問題として、①核廃棄物問題、②エネルギー開発による強制移住の問題、③エネルギー利用による汚染問題、④エネルギー貧困問題、⑤気候変動問題、の五つを挙げている*¹。

私見では、エネルギー正義に関わる問題の多くは、以下の二つの根本問題に起因する。それは、①人々のエネルギー利用の過少と過多の問題、②我々の社会におけるエネルギー利用の仕方の問題である*²。つまり我々は、人々の多様性に配慮した形での適正なエネルギーサービスの量(過少でもなく過多でもない量)について、またそれをすべての個人が安定的に得るための手段(エネルギーシステム)について、価値の問題を避けずに思考、議論していく必要がある*³。

Sovacoolは別の論文において、エネルギーに関する研究がこれまで工学的アプローチ(技術面)や経済学的アプローチ(経済効率面)に偏っていた事実を書誌データから示した*⁴。そして、今日のエネルギー問題を考える上では価値の問題を扱うことが不可欠であり、人文・社会科学的な知と研究がもっと必要であると主張した。さらに、国際学術雑誌の論文著者が欧米に偏っており、アジアなど他地域の知見がより求められているとも述べた。これらの主張は、福島原発事故を経験した日本において、より切実に響いてくるものと思われる。今後日本において、エネルギー正義の実現と新しいタイプのエネルギー研究が発展していくことを期待したい。

(奥島真一郎 おくしま しんいちろう 筑波大学)

*¹—Sovacool, B. K. et al.(2016), "Energy decisions reframed as justice and ethical concerns," *Nature Energy*, **1**, pp. 1-6. Jones, B. R. et al.(2015), "Making the ethical and philosophical case for 'energy justice,'" *Environmental Ethics*, **37**, pp. 145-168.

*²—前者の問題は、「持続可能な開発目標」(SDGs)にも関連する。SDGs は、概して言えば「人間の安全保障」と「自然環境制約」の両者を同時に達成しようとするものであるが、ここでは「人間の安全保障」が「過少」の問題、「自然環境制約」が「過多」の問題に対応している。

*³—奥島真一郎(2014)「Beyond GDP論とこれからの政策科学——「ナイーブな科学主義」を超えて」、*科学*, **84**(11), pp. 1142-1146.

*⁴—Sovacool, B. K. (2014), "Energy studies need social science," *Nature*, **511**, pp. 529-530.